
わたしとボクのぬくもりの距離。

霜月美由梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わたしとボクのぬくもりの距離。

【Nコード】

N8566Y

【作者名】

霜月美由梨

【あらすじ】

機織の職の端女である少女が売られ、そして買われた家での物語。

壹、（前書き）

平日は18:00～20:00、
休日は10:00を目安に更新していききたいと思います。

壹

わたしには、名前がない。

物心ついたときにはちゃんと名前があつて、それと呼んでくれるお父さん、お母さんがいたけれど、それもわたしの幼いときに殺されてしまった。

それ以来、わたしは、端女として朝な夕な機を織る仕事についていた。 そんなある日だった。

「おい」

わたしを呼ぶときはいつもこんな言葉だった。振り向くといきなり腕をつかまれ、引きずられて小屋の外に連れ出された。

なにかしてしまつたのだろうか。

そう思いながら周りをみると、きらびやかな衣を着た、いかにも身分の高そうな男達が私たちを囲っていた。

「こんなので良いのですか？」

わたしを使っていた男は下心のある目で男達を下から見上げて首をかしげる。

わたしだけ、置いてきぼりだ。

「ああ。この女だ。こい」

そういつて男の一人はわたしの腕をとって強く引っ張った。いつものことだ。

わたしは要らなくなったのだ――。

荷物を入れるだけの粗末な馬車に入れられてわたしはそう膝を抱えた。

がたがたと荷馬車は進んでいく。

今度の働く場所はどこだろうか。

男達の身なりからして、遊郭ではないことは確かだ。甘い香のにおいもしなければ、怪しい雰囲気もなかった。

いうならば、武官のような、高潔で近寄りがたい雰囲気があった。

「おい」

また、わたしを呼ぶ声。

気がつけば馬車は止まっていて扉を開けられていた。

ボロ布をまとっただけのわたしは、ふらふらと馬車から降りて、目の前に広がった大きな屋敷に息を呑んでいた。

「あ……」

「こちらに」

綺麗な衣をまとった女の人わたしを誘導する。首をかしげながらその人についていく。

わたしはどこかの家に買われたのだ。

「長旅ご苦労様」

そんなことをいつてくれる女の人を不思議に思いながら、わたしはあいまいに微笑んだ。

わたしは言葉をしゃべれない。声を失ってしまったているのだ。

「声が出ないの？」

こくりとうなずく。かすれた、さっきみたいな声は出るのだが、言葉はまるきりでなくなってしまうている。それはおそらく幼少時の体験のせいだろう。

「いつていることはわかるのよね？」

優しい、いうならばお母さんみたいな声音で女の方は、わたしのお姉ちゃんぐらいの年の人はいった。

わたしはまたうなずく。またもにご飯を食べられていない足には、この屋敷のやわらかい土はきつい。

「大丈夫？」

うなずく。足をとられそうだが、何とか歩いている。だが、すぐに足をとられてしまった。

「おっと」

すぐ上から優しい男の声が聞こえた。そしてふわりとわたしを包み込むぬくもり。

こけたわたしを受け止めてくれたのだ。

「ああ。蓮様^{リエン}」

「この子は？」

「私どもの新しい……」

「この子、あいつにukれないかな？」

「あいつとは、まさか、紅様^{ホン}に？」

驚いた声を上げた女の人にわたしは首をかしげ、そして、優しい香の香りのする衣をつかんで自分で立った。

「ああ、ごめんね。……ああ。だめか？」

「だめって、私どもはそれでも良いですが、でも……」

「この子ならあいつも気に入るよ」

そういつてわたしの頬をそおと撫でた男の人は、声に似合う優しい面立ちに笑みを浮かべた。

「はじめまして。私はこの屋敷の主の蓮だ。キミは、今日から私の家で働くんだよ」

わたしは声を出せないなりに辺りを見回して女の人に助けを求めた。

「……この子？」

「声が出せないそうです。……なにか聞きたいことがあるの？」
うなづく。紙と筆があれば何とか通じるはず。

そう思つてわたしはしゃがみこんで地面に文字を書いた。

「君、字をかけるんだね。なにになに？ なにをしたらいいかって？」

それを聞いて、いわれたことをこなすのが君の仕事だ。それに、ここの屋敷にある部屋を一つ貸そう。ぜひ、君には私の弟の世話をしてもらいたい」

弟？

そう書くと男の人、蓮さまはうなづいてわたしの頭をそつと撫でた。

お父さんにされていたみたいで、とっても優しい気持ちになれた。
「ああ。ちょっと気難しいやつだけれども、根はすつごく優しいやつだ。うるさい侍女は嫌だといつていたから、君の声が出ないのは

あいつにとっては良いのかも」

そういつてくすりと笑った蓮さまにわたしはあいまいに微笑んで立ち上がって一礼した。

「よろしく」

わたしの意志をしっかりと理解してくれていたらしい蓮さまにわたしはやっと心からの笑みを浮かべられた。

壹、（後書き）

ほとんど設定など練らずに、その場の勢いで書きました。
ので、なんか違う、どこか違うというのは御容赦ください。

壹、

そして蓮さまの案内で屋敷をざっとみた。

温かくて、それでいて、雨風のちゃんとしのげる家だった。

「そして、ここが君に頼みたい人の部屋だ。紅、入るぞ」

そういつて蓮さまは扉を開けて自分が入ると、扉を押さえてわたしが入るのを待っていてくれた。

「なんです？ 兄上」

部屋の奥から男の人の声が聞こえる。

髪をまとめたまま、昼寝でもしていたのか。まとめきれずに顔を覆っている烏羽のような髪に寝癖のつけたその人は出てきた。

鋭く整った顔立ちに陰をにじませて蓮さまをみて、わたしをみる。

「……この子は？」

「今日からおまえの世話をしてもらう子だ。えっと、名前は？」

わたしは首を振ってきょとんとした。

侍女に名前などあるのだろうか。逆に聞きたい気分だった。

「……もしかして名前が？」

蓮さまの呆然とした声にわたしはこくりとうなずくと、蓮さまの弟君でいらっしゃる、わたしと同じか、すこし上の年の男の人を見上げた。

「……焰^{イエン}」

「え？」

男の人は、そういつてわたしの髪に手を伸ばした。わたしの髪はどこの血を引いているのか、夕日色だった。

「おまえの名は、今日から焰だ」

吸い込まれるような黒い瞳にわたしは我知らずに目を奪われていて、そして、こくりとうなずいていた。

「声が出ないと？」

わたしはもう一度うなずく。

男の人はすこし困ったように眉を寄せて、蓮さまを呆れたような目でみた。

「もしかして、ボクが前の侍女がうるさいといったからですか？」

「いや、それもあるが、今日帰ってきたらちょうどこの子が来ていてね。年も近いから友達にも良いと思って」

「余計なおせっかいを」

「親切な親心さ」

きらんと玉が鳴る音がしそうなほど鮮やかに微笑んだ蓮さまに、男の人は深くため息をついて、わたしの肩に手を回して中に案内した。

「ということで、私はもう行くからな」

「はい。ご苦労様でした」

温かくて大きな手に肩をつかまれてわたしは無意識に男の人に寄り添っていた。

「……ということで、まず君は……。お湯殿で体を清めてきなさい」
「お……」

ゆどの？ と唇を動かす。

そうすると男の人は目を瞬かせて額に手を当てた。言葉を選んでいうようだ。

「体を清めるのに、川に行くだろう？」

こくりとうなづく。わたしは川で泳ぐのが大好きだ。

「そこまで行くのはここでは面倒だから、水を引いてあるんだ。その水をすこし温めて、ためてあるのだが……。そこですこし行水をしてきなさい」

噛み砕いた言葉でそうってくれる彼の言葉に、わたしはこくんとうなずいて、案内されたお湯殿なる場所に入って、初めての温水を堪能した。

「心地よかったか？」

邪魔にならないように定期的に切っている髪を綿の布で包んで、今まで来ていた衣よりもずっと柔らかで温かい衣に身を包んだわた

しは、彼の側によってうなずいていた。

「そうか。ならばよかった。……ボクの名は紅、という。覚えてくれ」

そういつてはにかんだ彼にわたしはうなずいて一礼した。

「そんなにかしこまらなくて良い。……これからは楽にしていくれ。すこし聞きたいことがあるのだが、いいか？」

首をかしげてみせると、紅さまはすこしいにくそうにしながら口を開いた。

「声は、まったくでないのか？」

その言葉にわたしは首をかしげて肩をすくめた。

正直、どこまで出るのかはわからなかった。

今までそんなものが必要な職業ではなかったから。

「ボクの名をいってごらん」

「……オン……あ……あ」

やっぱり出ない。音の残滓の音が出るだけで、まったく言葉ではなかった。

のどに手を当てて目を伏せたわたしに、彼は目を細めて小さく笑った。

「大丈夫。これから出るようになる。完全に音が出ないようならばそうはいえないが、ちゃんと音は出てるから」

ゆっくり出せるように練習しなさいと優しくいった彼に、わたしはこくんとうなずいていた。

これが、ご主人様の紅さまとはじめての日のことだった。

壹

「焰」

「……あい」

一応口を動かしてそういう。言葉ではないがそれでも声を聞いてもらいたくてわたしはいう。

紅さまとわたしは不思議なほど合った。

割れた石の破片がびたりとはまってもとの石を形付くるような不思議な感覚。

「これを兄上のところに届けてくる。君はここで待っていてくれ」
うなずいて紅さまが出て行くのを見送る。

ここに連れてこられてもう数ヶ月が経つ。

夏の一雨が待ち遠しい日差しが和らぎ厳しい冬の気配をおわす秋がすぐそこまで来ていた。

ここの屋敷の人たちはみんな優しくかった。

侍女以下の仕事をしてきたわたしに、根気よく仕事を教えてくれ、また、普通に話しかけてくれる。

それは、侍女などの下働きだけではなく、紅さまをはじめ蓮さまや、蓮さまの奥方様もそういう方だった。

なんとなく、わたしの家を思い出した。

わたしの家も、記憶が確かなら、ここまで大きくないものの侍女はいて、家事を手伝ってくれて、わたしの相手もしてくれていた。

「焰さん」

振り向くとすこし気位の高い侍女の一人がいた。正直、わたしはこの人が苦手だ。

「ああいうのは私たちが行くの。わたしがやりますといって、手の書状をとって蓮さまのところに行くのよ？」

すこしきつめの口調にうなずいて謝るように頭を下げる。

「本当に、声でないの？」

バカにするようなその声。

わたしには慣れたその声音。わたしは頭を上げてうなづく。

「こんなに立派なのがあるのに、何故出ないのかしらね？」

ぬっと白い手が伸びて、わたしののどをつかもうとする。

「あっ！」

わたしはなにが起こったのかわからずにのどをつかまれていた。

途端にこみ上げてくる嘔吐感。わたしは顔をゆがめて手をばたつかせていた。

「あ、……あい、で！」

あかんぼうがうにやうにやいているような声でわたしは抵抗する。

どうしても、のど元や、首を触られるのは嫌いだった。それは、父母を殺されたときにわたし自身ものどをつかまれ殺されそうになったからだろう。

「ほら、声出るんじゃない？」

わたしが本気で嫌がっているのをみて小気味よさそうに笑う彼女。そんな人だったのか。

わたしがばたばたと手をさせているのにもかまわずに、彼女はのどをつかむ指に力をこめて、本当にのどを握ってきた。

「ああああ！」

瞬間膨れ上がる恐怖。

わたしはなにも考えられなくなって、こぶしを握って振り回していた。

「危ないじゃない？」

彼女はそういつて、息が詰まらない程度に握ってくる。その時だった。

「なにをしている！」

鋭い声に、彼女はハッとした顔をしてぱっと離れた。わたしは、ただ狂乱の中にいてわからなかった。

「ああああ！」

暴れるわたしをみて紅さまは驚いた顔をしていたのだと思う。

そして、わたしのど元についた赤い手跡に、紅さまは、あろうことかその侍女の頬を打った。

「貴様はなにをしている！」

怒鳴る紅さまに侍女は屈辱に顔を赤くさせて、声を震わせて申し訳ございません。からかいがすぎました。と白々しくいつてみせる。それでも、紅さまの気は治まらない。

「もうどこへと行くがよい。私はもう貴様の顔などみたくはない」
そういうと侍女を部屋から追い払い、泣き叫び壁にもたれてがたがたと体を震わせるわたしにそっと近づいてきた。

「大丈夫だ。焰」

「いや、いや」

その時は確かに言葉をしゃべれた。頭を両手で抱えて首を振っていた。

紅さまは、わたしに目線を合わせるように床に膝をついてわたしの顔を、涙と鼻水でひどいことになっている顔を覗き込んだ。

「焰」

優しい声音。わたしはぼろぼろと涙を流しながら紅さまの優しい顔をみる。

お兄様である蓮さまよりはするどく整って、すこし近づくことをためらわれるような顔立ちは、時にびっくりするぐらい優しい表情をされる。

「もう、大丈夫だ」

そういつてわたしに両手を差し伸べてそっと抱きこんでくれる。

近くにあるはずのぬくもりが遠くにあるような気がした。

わたしは彼の腕の中に長い時間いたんだと思う。

そして、気がついたときには、紅さまが使われているふかふかの寝台の上で寝ていた。

「焰、いるか？」

蓮さまのすこし焦った声。わたしは慌てて体を起こして、着衣の

乱れがないかを確認したあと、寝室から出た。

「ここにいたか。紅は、そこにいるか？」

わたしは首を横に振った。

いつの間にか日が暮れていて、真っ暗な闇の中、大粒の雨が降り出していた。

「くそ、あいつどこに家出した？」

めずらしく悪態をつく彼に首をかしげて机の上に書き置きがあることに気づいて目を通した。

「焰？」

「……わる、かった？ イエン、の、ふぼ、ころした、の、は、……わが、ちち？」

声が出ることに驚いたが、その内容にも驚いた。

「……父上が君の父母にも手をかけていたのか？」

「ちち、うえ」

まだ、かすれる声で首をかしげると、蓮さまは嫌な予感がするといっ、詳しい話は紅が戻ったらするといっ、部屋を出て行ってしまった。

壹

わたしも嫌な予感がした。

その予感にしたがって、屋敷の外に出ていく。

服を汚してはもったいないからと、元のボロ布を身にまとして外に出る。

この時間帯、だれも外に出ないのだろう。わたしは、部屋から一本失敬してきたひもで髪をくくって、走り出した。

どこにあてがあるというわけではなく、ただ予感の知らせた場所へ、走る。

屋敷の格子窓からみていて思ったのだ。

——ここはふるさとなのではないのかと。

あの川の流れや、あの里山。この屋敷の近くにある町になんて見覚えがありすぎて驚いた。

そして、町に連れて行ってくれた紅さまが、その町の人に恐れられているということにも、驚いた。

町の人曰く、紅さまは先代さまにとっても似ているそうで、それが怖いといていた。

どこの流れ者かわからないわたしに名前をくれて、なおかつ町に出て行かせて遊ばせて、欲しいものを買って与えてくれるような優しい方がそう恐れられていることがわたしは口惜しかった。

そう、紙に書くと、彼は、珍しく頬を染めてそっぽを向いた。

「そんなこというんじゃない。……はずかしい」

そういう彼にわたしはにっこりと笑っていた。

ぴたりと雨戸の閉められた家の隙間を走る。

泥が足だけでなく、太ももや全身にかかる。それでもわたしは走るのをやめなかった。

「さま、……」

ポツリと呟く声が意外としっかりしたものだ。ドクンと嫌な

予感が胸を締め付ける。

「紅さま！」

そう叫んだ声が、普通に出た。

わたしは驚きながら辺りを見回す。町を通り抜けて里山の裾野まで来ていた。

足がもつれて転ぶ。体を打つ雨が大粒で、冷たくて痛かった。

「紅、さま」

わたしは立ち上がって、もつれる足でまた走り始めた。

秋の色が香りはじめたその裾野をすぎて、真新しい塚や朽ちた石がぽつんと置かれているだけの墓場にやってきた。

なぜ、ここにきてしまったのかはわからない。だが――。

すこし離れたところに見えた人影に、わたしは驚いていた。

すこし朽ちた土盛りの正面にひざまずいてうなだれる人が一人。

その人の衣は色鮮やかな涙色。

「紅さま！」

叫んで、駆け寄る。

その土盛りがだれのものであるかはどうでもよかった。部屋着の単ではこの雨は冷たすぎる。

そう思って隣に座り込む。不思議なおいがした。

すこし、生臭いような、金物臭いような。紅さまの傍らには綺麗に磨かれている一つの短剣がある。そして、うずくまったからだが目隠しているのは――。

「……紅、さま」

右肩を左手で押さえてピクリとも動かない、彼にわたしはまた声をかすれさせていた。

「いや……」

「う」

かすかにその背中が震える。わたしは夢中でその背中に手を当てた。

「紅さま」

呼びかけると、雨に打たれて、傷の痛みに顔を白くさせた紅さまがこちらをみるように首をめぐらせて声を詰まらせ、そして、目を細めた。

「ああ、焰……」

吐息だけのその声にわたしは首を振っていた。

「いや、嫌です、紅さま!」

声が出るように云々の前に、ただただそれだけだった。

震える背に手を当てながらわたしはそれだけをいつていた。

「……もうし、わけ、ない。………ごめん」

ちいさな、ゆっくりな呟きと共に、彼の体から力が抜けていく。

「だめ!」

そうゆすつても、彼は痛そうに眉を寄せながらも、それでも申し訳なさそうに、していた。

「いやあああああああああ!」

そして、彼のまぶたが完全に閉じた瞬間、わたしは叫んでいた。

壹

それは幸いだったのだろう。

その金切り声に、不審に思った町の墓守の老人が見に来て、私たちを発見してお屋敷に伝えてくれたのだった。

お屋敷からの使いの人たちが、私たちを屋敷まで連れて帰り、紅さまは居室の寝台上で、薬師の治療を受けていた。

わたしはというと、放心状態が続いて、促されてようやく、お湯殿で体を清めて、元の侍女の服を着込んだ。

「よく、見つけてくれましたね」

泣きはらしたわたしの顔に蓮さまはいたわるようにいった。

わたしはうつむいてぶんぶんと頭を振っていた。

「父が、ここによってきてバカ息子を成敗してくれたといったときはわたしも、焦りましてね。あの父はどこかがいかれている人ですから、剣で聞かなければならないと思って、気だけが競って気がついたら口が利けないほど痛めつけてしまっていましたよ」

蓮さまは苦笑気味にそういつて、机に用意された急須にお湯を入れてお茶を二つ入れた。

本当はわたしの仕事なのに、なんで体は動かないの。

「どうぞ。すこし温かいものでも飲んで体の力を抜いてください。あれは大丈夫です」

紅さまの傷はひどいものだった。

右から左は斜めに切られ、あとすこし入っていれば、死は免れなかっただろう。

そして、とっさに後ろに跳び退って刃の入りを浅くしたのだろうと、ざっと状態をみた薬師の人がいていた。

「でも……」

「大丈夫。私たちの一族のものは皆傷の治りが早いのです」

それに、そこらの虫並みの生命力もありますからと朗らかに笑っ

てみせた蓮さまにわたしはなにも返せずに、ただ、入れてもらったお茶を両手に持って、静かにすすった。

「……そうだ。先ほど、いったことですが」

わたしは顔を上げてそれに応じる。おそらく、置き手紙のことだろう。

「私どもの父、先ほどもいったように頭がおかしくて、虫の居所が悪いだけで村や町に下って人を切り殺していた」

「……」

なにもいわずにわたしは蓮さまを見上げる。蓮さまはそっと目を伏せて眉を寄せた。

「私の母も、そのせいで……。紅の母親は、紅の目の前で殺されて……」

「え？」

かすれた声に、なってしまった。蓮さまはさびしげに笑ってそっと目を閉じた。

「自分の中にも、あの男の血が入っているなんて信じたくないんです。紅は特に。でも、その姿は父の生き写しで……」

そう呟いた、蓮さまは涙を流しているように見えた。

だけれども蓮さまは泣いているわけもなく、ただ小さく笑ってみせて目を開いてわたしを優しく見つめた。

「おそらくあなたもその町の出身なのでしょう。町人が、ユイに似ているといっていましたから」

「ユイ」

「おそらくあなたの本当の名前。字はわかりませんが」

「……わたしにはもう、紅さまがつけてくださった名前があります」

「ええ。それでも、名は父母からの贈り物。大切に胸の中にしまっておいてください」

優しく笑った蓮さまにわたしはこくりとうなずいてぬるくなったお茶を見下ろした。

「蓮」

落ち着いた、薬師の声。

はっと顔を上げると、難しい会話を蓮さまと薬師がして、そしてその会話が一段楽したところで蓮さまがわたしにうなずきかけてくれた。

「今は意識がなく、傷が膿んでいて大変な状態らしいですが、とりあえず大丈夫みたいです。さ、いっておやりなさい」

温かいその言葉にわたしはうんとうなずいてお茶を置いて、蓮さまの居室を抜けてすこし離れたところにある紅さまの居室に入って寝室に足を踏み入れた。

「う」

かすかなうめき声が聞こえる。

そろそろと移動して寝台の側に座ると、包帯に覆われた肩がすこしだけ布団から出ていた。

「紅さま」

と呟いても答えるべき人は深い闇のそこにたゆたっている。

布団を首元までかけてやると紅さまはかすかに目を開いてぼんやりと天井を見上げた。

「紅、さま？」

小さく呼びかけると、紅さまは左手を出して、痛みに顔をゆがめながらこちらに差し出してきた。

「どうしました？ お水でも？」

その言葉に紅さまは小さく首を振りながら辛そうに目を細めた。ぎゅっと体の奥が締め付けられるような感覚。

震える大きな指先をそっと包み込みながら、わたしはしっかりと握っていた。

「紅、さま？」

紅さまは指先の感触にすこしだけ、眉によっていたしわを解いたようだった。

雨に打たれて、そして傷が膿んで熱が出ているのだろう。

荒い呼吸の中にも安堵の吐息をほうと漏らしてそのままずっと

寝台に体を預けて眠ってしまっていた。

「焰さん」

背中から優しい声が降ってきた。

わたしを最初に案内してくれた侍女の先輩、春さんだ。

「今日から紅様の身の回りのお世話をしなさい」

うんとうなずいて、わたしは春さんを見上げる。

「大丈夫。あなたがしていた仕事は私が引き受けるから。あと、あのバカ娘やってみたね。一人減ってしまったけれども暇している侍女は多いのよ？」

あなたと違ってねと笑う春さんにわたしはすこしだけ笑ってこくりとうなずいて、お願いしますと頭を下げた。

春さんは笑いながらうなずいて、ふと、紅さまの左手、わたしが握っている手に目を向けた。

「それは紅様が？」

驚いた様子の春さんにわたしはうなずいて、笑った。

「そう。ならばなおさら側にいて差し上げなさい」

深い声の春さんはなぜか泣きそうに眉を下げてそういつて、あと忙しいからと外に出て行ってしまった。

「紅、さま」

高い熱にかすれた声を上げてうめき、眠っている紅さまの手をきゅと握り締める。

まだ、この冷たい手には力がない。

だけれども、絶対回復してわたしの手を握ってください。

わたしはそう思って、片手を彼の手に残して、もう片手で汗に凝った額をそっと、ぬらした手ぬぐいで拭いていく――。

式

何故、運命というものは容赦がないのだろうか。

ボクは時々、そんなことを考える。

雨に打たれ、二つ盛られた墓を見下ろしながら、雨に打たれる。彼らは父に殺された。

そして、ボクと一個しか変わらない女の子は殺されたのか生きているのか。

あの赤髪の子は彼らが殺された日以来、みていない。

「おまえか」

しゃがれた、男の声。ボクは、もつとも憎むべき人間を背後に迎えていた。

「父上」

「感傷に浸っている間があるのであれば、勉学に励め。兄のように、そして、私のように地位を高め、都まで上がって来い」

「この町はどうするのです？ この領地は」

「都の暮らしにはたらぬもの。他のやつらにくれてやれ」

兄が都に行くことは当の昔に決まっていたことだった。ボクがいずれこの町を治めるのだと勤めて歩き回るようにしていた。もし、本当にそうなったとき、困らないように。

「おまえは一番私に似ている。期待しているぞ」

下の言葉は知らないが、上の言葉ならばこの男以外にもたくさんの人がいつてきた。

この男は、似ているからかわいがるという思考の持ち主ではなく、ただ、使える駒ができたのだと喜ぶだけだった。そして、それを母が諫め、かんしゃくを起こした父が母を殺したのだった。

幼いころの記憶だが、やけにはつきりと残っている。

いつもならばがんばります、とか、また、御冗談を、というが、今日のボクは違かった。

「ボクは、都には行きません」

はっきりとした言葉に、背後の気配が変わる。ボクは振り返って、鬼と対峙する。

「なに？」

ボクの老けた顔が赤く染まっていく。まだ、ボクは怒りにこの顔を染めたことはない。

「ボクはここを治めて骨をここに埋める覚悟をしています」

なぜ、こんなことを口走ったのだろうか。

兄の口を通してだったらこの人はこんな顔をしなかつただろう。

「ふざけたことを。この私のいうことが聞けないか？」

「ボクはあなたの使える駒ではありません」

『この子はあなたの使える駒ではありません』

母がいった言葉をそっくりそのまま再現してみせる。

ボクだって覚えているんだ。そして、この男のこの後の行動も。

「ならば、おまえは消えろ」

そういわれるのはわかっていた。

「感情のままに、自分より下のものを切り殺し、少女の運命を狂わせたあなたの言いなりなんてなりやしない」

男は、父はボクに刃を抜いてのど元に突きつけた。ボクもそれとなくよけて自分の持っていた、邪魔にならない程度の長さの剣をとる。

「この父に刃を向けるか」

「妻を切り殺し、子供に刃を向ける父にいわれたくありません」

所詮は似たもの同士なんだよ。バカ親父。

そう心の中で付け足すと、それが聞こえたように父の顔が真っ赤に染まって、一瞬で剣が消える。

僕はとっさに後ろに跳び退るが、墓があることを思い出して体をひねる。

鼻先を刃がかすめ、胸辺りの衣が裂ける。

そして、ボクは体勢を崩した父の隙を狙って飛び出していた。

その時だった。父の開いた左手がもぞりと動く。

嫌な予感がした。

剣を投げつけるように手放して後ろに跳び退るが、父は右腕に刺さったボクの剣を振り払うように腕を振り回しながら左手で逆袈裟に僕を切りつけていた。

腹から肩にかけて熱いものが肉を断つ。

「この雨だ。だれも通らないだろう。その発言、後悔して死ぬが良い」

結局この人は決定的な致命傷を与えずに、人を殺す。

中途半端なんだよやることが。

水音を立て、去る人を感じながらボクは、屋敷によるであろうあの男が、剣に仕込まれた毒に苦しみあえぐ姿を想像して、かすかに笑みを浮かべた。

斜めに切られた傷がずきりと痛む。

ボクは飛ばされた剣を拾ってから、衣が汚れることもいとわずに、さっきまで立って見つめていた墓の前に座り込んだ。

あだ討ちなんて、思わない。ただ、ボクもあの男と同じで、自分の感情に任せて剣を振るっただけだ。

焰の両親を殺したのが、父だと、信じられなかった。だが、焰のあの髪の色は見覚えがありすぎた。

十数年前に、ボクと仲良くしてくれていた一個下の女の子。

ユイと呼んでいたあの子は、両親が殺された翌日から姿をみせなくなっただけだ。

ボクもそのころには母を殺されて、殺されるということがまだ理解できなかったが、幼いなりに殺される、死ぬということはもう逢えなくなることなのだ、と感じていた。

「ごめんな……」

そして、彼女と再会した。

美しく成長をしていた彼女は、ボクのことは覚えていないようだった。それに、彼女は声を失っているようだった。

あまり心に負担がかかりすぎると声を失うのだと薬師がいつていた。

あの幸せだった町長夫婦が目の前で切り殺されたのだ。許されざることだ。

ボクとほぼ同じ顔が彼女の両親を殺したのだ。彼女がボクを憎むのは時の問題だった。だから、と。

「ごめんな……」

痛みに視界が煙る。雨だけでない視界のぶれは目の前の土盛りを大きくする。

音を立てて崩れ落ちたボクは、左手で右肩を押さえてうめき声を噛み殺した。

雨の音が耳をつんざくようだった。

痛みで意識を失いたいののに、それを引きとめるように雨が耳障りだった。雨の音は好きだったはずなのに――。

「……さまっ！」

愛らしい、小鳥がさえずるような声が聞こえた。その声は悲痛さを帯びて、また、必死さが感じられた。

だれの声だろうか――。

首をめぐらしたくても、体がいうことを利かなかった。

体の冷え方からして、だいぶ、時が経っているようだった。

「紅さま！」

近くで、聞こえた。

体を動かしたい。

この声の主を確かめたい。

ぬかるんだ大地に膝をついたような激しい水音。髪に泥が跳ねるが、雨がすぐに洗い流す。

「紅、さま……」

ボクはやっと頭を動かして、頬を地面に擦り付けるようにしながら、声の主をみて、体の力が抜けたのを感じた。

「ああ、焰……」

意識して漏れたため息じゃなかった。

ただ、本当に、最期かもしれないと思ったから、安心したのだ。
だれかが傍にいてくれることに。

彼女は首を振ってなにかをいう。

それも、もうボクの耳は聞き取ってはくれなかった。

まあ、いいか。

最期に一目みられたんだから。

僕はそう思いながら、あっけなく意識を失ってしまっていた。

右肩からかけての傷の痛みがつかの間和らいだことを、不思議に
思いながら。

式

それから夢うつつだった。

激痛にさいなまれたかと思ったら、温かい指先がボクの手を包み込んでくれたり、髪を撫ぜられたり、頬を撫でられたり。

声は聞こえなかったが、うつすらと覚えているのは紅い髪だった。そして、ふと、目を開いた。

天井の暗さに不思議に思いながら、ボクは体を起こす。さらりと、いつもは束ねている、母に似た黒い髪が背中に揺れてくすぐったかった。

右肩から左の腹までに引き連れた痛みを感じたが、動けないほどではない。

ボクは布団をはいで、寝台の隣においてあった履物に足を突っ込んで、ふらふらする体を叱咤しながら寝室を出た。

「紅さま？」

湯殿を使っていたらしい焰が素っ頓狂な声を上げる。

髪を拭いたままの格好できょとんとボクのことをみて、そして、頭が理解したらしい。彼女はボクに駆け寄ってきた。

だが、ボクまであと数歩というところで彼女の体が傾いだ。

「焰！」

ボクが慌てて駆け寄って受け止めると、急な動きに耐え切れなかった傷が痛みを発する。

息を詰まらせて痛みをこらえたボクは、ボクに寄りかかったままでいる焰を見下ろした。

「焰」

「ごめ、んなさい。ちょっとふらつとしただけで」

そういつて立とうとするが、体に力が入っていない。ひとまず彼女を床に座らせてみるが、一人で座れないようで、ボクに体を預けてくる。

触れ合う部分がとても熱かった。

湯殿から上がったばかりだからだろうか。

「焰」

くたりとボクに体を預けて焰は目を閉じて浅く息をついている。けがをしているボクには荷が重い。

「だれぞ」

よく通る声でそう呼ぶと、がたがたとあわただしい足音が聞こえてきて、ぞろぞろと人がなだれてきた。

兄と、薬師と春と、その他侍女達だった。

「おま、いつの間に起きた」

「いきなりお起きになられるとは相当回復したようで」

「小言はあとで聞く。この子を」

「お？」

兄はボクの胸に寄りかかっている焰をみてうれしそうな顔をした。

「だれか、赤飯」

「だれがやるか」

薬師がすかさず近場にあった内履きで頭を殴る。見慣れたやり取りにボクはふっと息を吐いて焰を見おろした。

そして、薬師は、ボクの顔色を確認してから焰の顔をみて苦笑をした。

「栄養失調に、疲労。ちよっとした風邪で熱が出ているようです」

「ボクの寝台に」

「それはだめだな。それに貧血もとれていない。だれか、その部屋の寝台を用意してくれるかな」

なだれてきた侍女の何人かにそういった薬師は、ボクの胸にいる焰を取り上げて横抱きに抱き上げると、すぐに用意ができた寝台に彼女を寝かせた。

「風邪薬を作りましょうね。すこし待っていてください」

侍女達も、それにしたがって引き下がる。部屋には意識を失ってしまった焰とボクと兄が残った。

式

「おまえが起きるまでおまえの身の回りの世話全部やってきたんだ」
薬師の背中を見送って兄が口を開いた。

その言葉に驚いたが、うつすらと覚えているのはこの子の存在だった。

「休みなしに？」

「ああ。それはもう、献身的でな、オレもこんな……」

「どんな妻を所望でしょうか？」

言葉の先を読んだしり上がりの声に兄の顔が引きつる。

兄の妻、養姉が気を利かせて桶と手ぬぐいを持ってきたのだった。
「いやいや、俺にはおまえだけで十分だ」

化けの皮がはがれた兄の暴言を予想していたらしい薬師らしい手配だ。にこやかに、そして華やかに笑って見せた養姉はボクに近寄ってきた。

「左様にございますか」

「か」の時に思い切り兄の足を踏みつけて養姉は近くの机において、その中の水に手ぬぐいをくぐらせてぬらした。

兄は変に声を詰まらせてつま先を押さえてうずくまった。

内心バーカといってやると、養姉は優しく笑ってボクにその手ぬぐいを差し出した。

「これを額に」

慈しむその顔に、ボクはうなずいてその細い手から手ぬぐいを受け取って焔の額の髪を掻き分けて乗せた。

「良い子ですね」

養姉はそういつて焔の顔を見、笑う。

痛みから回復した兄もうなずいてボクの隣に立つ。

「俺もそう思うよ」

そして、しばらく経って、薬師が風邪薬を作って持って来た。

飲みやすいようにと丸薬のそれを彼女の口に含ませると、案の定吐き出した。彼の薬は苦いのだ。

「あ、なんで吐き出すかなー」

「だってまずいからでしょ」

「まずいって、まずいもの飲みたくないから風邪引かなくなったんでしょー」

兄の幼馴染の薬師はそういって兄をみるが、兄はどこかに吹く風といったようにそっぽを向く。

「おまえの商売を繁盛させたくないからに決まっているだろう？」

まあ、がんばって飲ませてやってくれ」

そういって兄は養姉と薬師、その他侍女を引き連れて部屋を出て行ってしまった。

「飲ませてやってって……」

手のひらに吐き出された半分溶けかかったその薬に、ボクは途方に暮れたが、左腕で彼女を抱き起こしてもう一度口の中に入れた。

「飲め」

強い口調でいうと、彼女はひくりと息を吞んでこくと飲んだ。

その後にはまずそうに顔をしかめるのをみて、僕は一人笑っていた。まるで子守をしているような気分だ。

「良い子だ」

そういって頭を撫でる。

彼女を寝かせてようと、そうと体を傾けながら寝台に彼女を横たわらせると、焰は夢うつつなのだろう。

ぼんやりとボクを見上げ、そして、両手をボクに差し伸べてきた。

「焰」

さすがに驚いたボクが声を上げるが、彼女に声は聞こえていないらしい。背中に回してきゅっとしがみつこうとする彼女に、ボクは動揺していた。

「どう、すれば……」

辺りを見回して助けを求めようとしたが、それははばかりれる。

泣きそうに眉尻を下げながらコトンと枕に頭を預け眠ってしまった彼女に、ボクは、深くため息をついて、彼女の意思に従うことにした。

履物を脱いで、彼女に負担にならないように隣に横たわる。

腕は回されたままになるから、ボクの下敷きになってしまう腕を僕の胸に持つてくるときゅっと胸元の衣をつかんできて引き寄せてきた。

「焰……？」

左側を下にして、ボクは彼女を引き寄せる。

自然と抱きしめあう格好になった気恥ずかしさがあるが、今までにないほどの力でしがみついてくる、ぬくもりのある彼女の体に驚きながらも、なぜかほっとしていた。

「……」

ボクもまだ床についていなければならなかったんだと思う。

隣にある生命あるぬくもりと、確かな重みを感じながらボクたちはいつしか眠ってしまっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8566y/>

わたしとボクのぬくもりの距離。

2011年12月2日19時58分発行